

今年度の指導の重点	津山っ子の学びを高める “3つの提案” 6つの取組
豊かな心をもち、自ら学び、実践力のある子どもを育てる。【ともに学ぶ子 ○認め合う子 ○たくましい子】 ○ 基礎・基本の徹底と思考力・判断力・表現力の育成を図り、ともに学ぶ喜びと達成感を味わわせる指導に努める。 ○ 豊かな人間性を育み、互いの人権を大切に、誰とでも仲良くできる子どもの育成に努める。 ○ 心と身体のたくましさを持った子どもの育成に努める。	□学習や生活のルールを全教職員で共有して児童生徒や保護者へ提示している 当初【 A 】 年度末【 】 □授業の中で学習のめあてを持たせめあてについて振り返る場を設定している 当初【 B 】 年度末【 】 □言語活動充実のために話し合う活動を大切にしている 当初【 B 】 年度末【 】 □学習のねらいに応じてICT活用等による多様な学習を工夫している 当初【 B 】 年度末【 】 □授業で学んだことが振り返ることができるような家庭学習の仕方を提示している 当初【 B 】 年度末【 】 □家庭地域と共に育てるためにHPや通信等で発信している 当初【 B 】 年度末【 】

※達成度 「S:目標を大きく上回った(100%超)」 「A:目標を十分達成できた(85%以上100%未満)」
 「B:目標を概ね達成できた(70%以上85%未満)」 「C:目標をある程度達成できた(50%以上70%未満)」
 「D:目標をあまり達成できなかった(30%以上50%未満)」 「E:目標を達成できなかった(30%未満)」

調査結果について(調査結果において明らかになったこと)	
【学力状況調査の結果】 全国(6年生) ○国語では、A「知識」に関する問題と、B「活用」に関する問題のどちらとも正答率は県平均・全国平均を上回った。 ○算数でも、A「知識」問題と、B「活用」に関する問題のどちらとも、正答率は県平均・全国平均を上回った。 ○理科においても、「知識」「活用」ともに、正答率は県平均・全国平均を大きく上回った。 ○国語Aでは、敬語を使う(本校79.2%、県57.9%)、必要な情報を捉える(本校89.6%、県73.7%)が大きく正答率を上回っているが、主語述語の関係に注意して正しい文を書く(本校20.8%、県33.6%)が下回っている。 ○国語Bでは、全ての観点において県平均を上回っているが、記述式の問題に対して無回答率が高く、詳しく書いたり、まとめたりすることに課題がある。 ○算数Aでは、角の大きさを求める問題(本校70.8%、県59.9%)が高いが、12÷0.8の式で求められるものを選ぶ問題(本校39.6%、県38.5%)が低い。 ○算数Bでは、正答率自体は県平均を上回っているが、記述式(数学的な考え)に対する無回答率が高い。 ○理科では、「観察・実験の技能」観点の正答率が高く、「科学的な思考・表現」観点に課題が見られる。 県(小学校【3年～5年】) ○国語では、全ての学年において「話すこと・聞くこと」の領域で県平均を上回った。3年生では、「書くこと」「読むこと」、5年生では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」において、課題が見られる。4年生に関しては、全てにおいて県平均を上回った。 ○算数では、「数と計算」の領域においては、県平均を上回る傾向にあったが、「図形」の領域においてやや県平均を下回る傾向にある。 基礎を問う問題より、活用問題の方が県平均との差が大きく上回っている。	【学習状況調査の結果】 ○平日に、テレビ・ビデオ等の視聴する児童の割合が県平均よりもやや高い。 ○家庭学習では、平日に宿題をすることや復習・予習に取り組む児童の割合は上回った。しかし、自分で計画を立てて勉強している児童は、県平均をやや下回った。 ○読書に平日に2時間以上読書している児童の割合は県平均よりも高いが、10分以上30分未満と全くしない児童の割合は県平均をやや上回っている。 ○家の人に「行ってきます」「ただいま」のあいさつに関しては、県平均を大きく上回っている。しかし、近所の人に会ったときにあいさつしているかに関する肯定的な回答の割合は県平均よりやや低い。 ○地域の行事に参加したことがある、地域社会などでボランティア活動に参加したことがあると回答した児童の割合が全国平均、県平均よりもかなり高い。 ○自分の考えを発表する項目に関しては、肯定的な回答が全国平均、県平均を上回っている。しかし、学級の友達との間に話し合う活動を行っていたかに関する肯定的な回答は全国・県平均よりもやや低い。 ○将来の夢や目標を持っているかに関する肯定的な回答が全国・県平均よりも大きく上回っている。 ○調査時間が十分でなかったと回答する児童の割合が、全国平均や県平均よりも高い。

成果	課題
○国語の漢字問題の正答率が高く、朝学習や「漢字オリンピック」等の取組の成果が見られる。今後も継続的に取り組んでいく。 ○国語では、前年度課題だった「話すこと・聞くこと」の領域がペア・グループ学習を授業の中に意識して取り入れるようになったことで、改善された。 ○算数では、問題データベース等の活用で、様々な基礎的問題にくり返し取り組んだ成果が見られる。 ○授業における「めあて・まとめ」「学習内容のふり返し」を意識した授業を行うことで、自分の考えを持てる児童が増え、算数の活用力の向上につながっている。 ○地域の行事に参加したり、ボランティア活動に参加したりする児童が多く、自分には良いところがある割合が高く、自己肯定感にもつながっている。	○授業において書く活動をしっかり取り入れることにより、記述問題の正答率が高くなってきているが、主語述語の関係を意識して書いたり、自分の考えをまとめて書いたりするなど、「書くこと」に課題が見られる。 ○算数では、数学的な考えを問われている問題に対して無解答率が高い。生活の中で算数の問題が使えるという経験が乏しいため、問題のイメージができて、解くことが困難と考える。 ○問題の形式に慣れておらず、答え方・時間配分(時間の使い方)に課題が見られ、後半に無解答率が高くなる傾向が見られる。 ○テレビやスマートフォンなどのメディアに接する時間が多く、家庭でのきまりなど取り組み方に課題がある。 ○児童自身はあいさつをしていると回答しているが、声が小さかったり、気持ちがこもっていなかったり、誰に対しても気持ちのよいあいさつをしているかということに課題がある。

何を(改善すべきこと)	いつまでに(成果検証の期限)	どこまで(対象と達成目標の設定)	どのように(方策)	達成状況(12月末現在)	達成度	達成状況(年度末)	達成度	次年度への改善点・重点課題
書く力の育成	今年度末	自分の言葉で、授業のまとめや振り返りを書くことができる。(学期ごとのアンケートで肯定的な児童が80%に達するようにする。)	・授業の最後に自分の言葉でまとめ、振り返りを書く活動を充実させ、書く力を高める。 ・書くことに慣れるために、問題データベースなどを活用し、例文(表現力)トレーニングを行う。	・どの教科でも、授業の最後に振り返りを書くように意識づけ、自分の言葉で振り返りが書けるようになってきた。11月下旬実施の「秋フェスタ」の結果を分析し、より効果的プリント集も活用して、習点を克服する。	B			
量感覚をイメージできる児童の育成	今年度末	随時算数コーナーの内容を更新し、全学年が楽しみながら、活用できるようにする。	・算数コーナーを設け、具体物に触れさせ、操作活動を通して量感覚をイメージしやすい学習環境を整える。導入時の算数教具を工夫して作成し、職員で共有する。 ・問題データベースや県学力の問題を印刷してボックスに入れておき、児童が自由に活用できるようにする。	・算数コーナーを設置した結果、意欲的に操作活動を行う児童が見られ、楽しみながら量感覚をイメージしながら触れることができた。さらに、展示内容を工夫し、随時様々な活動ができるように設定していく。	B			
家庭学習の定着と充実	今年度末	家庭学習時間(学年×10+10)が学校全体の80%以上できるようにする。	・家庭学習の手引きを使用し、児童だけでなく、保護者への協力も仰いでいく。 ・自主学習ノートの活用(内容充実のために参考となるノートを玄関ホールに掲示したり、学級で紹介したりする。)	・規範となる自主学習等のノートを玄関ホールや教室などで知らせることにより、目標をもって学習できる児童が少しずつ増えている。(70%)家庭学習の定着率は、83%で増えてきている。	B			

※達成度 「S:目標を大きく上回った(100%超)」 「A:目標を十分達成できた(85%以上100%未満)」 「B:目標を概ね達成できた(70%以上85%未満)」
 「C:目標をある程度達成できた(50%以上70%未満)」 「D:目標をあまり達成できなかった(30%以上50%未満)」 「E:目標を達成できなかった(30%未満)」

小中連携の取組	保護者・地域へ理解・協力を求めること
○小中の系統的指導について研修を深め、今後の指導に生かすために、中学校区で授業参観をしたり研修をしたりする。 ○義務教育9年間の連続性のある指導の研究、取り組みの交流をする。(生活目標「時を守り 場をきれいにし 礼を尽くす」や学習規律など) ○「家庭教育のすすめ」に基づく実践交流・実践計画をおこなう。	○学年始めや学期始めに家庭学習の手引き・学習スタンダードを保護者に配布し、家庭でも学校とベクトルを合わせて指導していけるように協力をお願いする。 ○テレビやスマートフォンなどの視聴時間、ゲームの使用時間の削減を呼びかける。 ○学校支援ボランティア事業で、学習・環境・安全支援で地域人材を活用し、活動を通して地域と学校をつなぎ、地域の中の学校として一緒に子どもを育てていく。